

君は天国へ、僕は地獄へ。

昨日、友達が死んでしまった。交通事故だった。僕はその現場に居合わせたから、人の命が消える瞬間を目の前にしてしまった。『それ』はまさに一瞬だった。

トラックにはねられた友達は宙を舞い、ものすごい遠くまで吹き飛んだ。

映画とかで見るグロテクスさは微塵もなかった。

ただ、バトミントンの羽根がラケットで飛ばされたようだった。

むしろ瞬きほどの間にあっさり人の命なんてゴミのように消えてしまうんだ。そんな感想ぐらいしか浮かんでこなかった。僕は多分悲しかった、と思う。

それ以来、僕は一言も喋ることができなくなった。お医者さん曰く、心因性の失語症になってしまったらしい。親しい友人の死を目の前にしてしまっただけのショックが原因らしい。なんてドラマでありがちな展開なんだろう。ショックというか簡単に死んじゃったなあぐらいにしか思わなかったんだけど、それは黙っておこう。まあそもそも喋れないんだけど。僕の余計な口をふさぐためだったのかもしれない。もともと僕は活発に喋るタイプじゃないし、死んだ友達ともそこまで大した会話をした記憶もない。

僕はあっさり死んでしまった友達のことを懐古していた。僕は彼のことをヒーローだと思っていた。彼は、誰にでも優しい。人に怒っているところを見たことが無い。努力を惜しまない。いじめられてた僕を守ってくれた。校舎裏で何人かに取り囲まれて殴打されていた僕を。守った、という喧嘩でもしたみたいだが、全くそんなことはない。彼は人を傷つけることが嫌いだったから、殴り合いなんてできるわけもなく、ただ惨めに殴られていただけだった。結局、誰かがその様子を見ていて、先生を呼びに行ってくれたおかげでなんだかんだ助かった。どんなに惨めになっても誰かを守る彼は僕にとって間違いなくヒーローだった。常に自分の正義のために他の誰かを傷つけるような偽物なんかじゃなかったんだ。死ぬには惜しい人だったなあ。交通事故の原因も道路で轢かれそうだった猫を逃がそうとしていたかららしい。彼らしい理由じゃあないか。きっと彼の両親も涙を流したんだろう。死に際まで彼らしかった。彼はいつでも正しかった。そう、その命を終える瞬間まで。彼は死ぬときに何を思って死んでいったんだろう。僕はそれが知りたい。

そんなことを思い出しながら臨時で僕が入院している病院の至極健康的な食事をなんの問題もなく食べ、水を飲み、漫画を読んで面白いなあとか思いながら過ごした。なあんだ、何も変わらないじゃないか。いつもの日常と大して変わらない。当然だ。人は忘れる生き物だ。歳を重ねるたびに大事な人たちとの思い出や悲しかった出来事を毎日忘れていく。永遠の思い出なんてきっと無い。

有名な芸能人が死のうが一般人が死のうが、周りの人々が悲しんでいられるのはせいぜい少しの間で、ほとんどの人々はまた日々の日常に戻っていただけ。それがその人の価値次第で数日変わるくらい。

世界では毎日15万人の人が死んでいて、そのうちの1898人の人々が自殺していま

す。そんなニュースを見ていた。それだけの人がいなくなっても世界は毎日何事もなかったように動いている。果たして本当に人の命に価値はあるのだろうかと思いつつながら日々をぼんやりとしながら腐らせているのはきっと僕だけじゃない。たかが一人死んだ程度のことなんだ。ただ、それだけ。

そう思っているのになぜか、胸に穴が空いたように、とはよく言うが、僕は背骨が抜かれてしまったような気分と何か胸に詰まっているような感覚をかすかに感じていた。この気持ちはなんだろう。

一日のほとんどをベッドの上で過ごす無益な日々を過ごしながら今はもういない彼が何を思って死んでいったのかを考えているうちに僕は病院を退院して家に戻った。

失語症になった僕に頑張って話しかけてくれる両親がとてもうっとおしくて困った。僕は話せないんじゃないかと人と話したくないだけなのかもしれない。

家に警察の人や、メディア関係の人が何回か来ていたらしいけど、毎回親が追い返していたらしい。『大切な友達がいなくなった息子にそんなひどい仕打ちがどうしてできるんですか!』とか言ってたとは思うけど毎日玄関のノック音がひどくて母親はノイローゼ気味になってしまっていた。人の死をニュースのネタ程度にしか思っていない、その追求のために人をノイローゼにできるような大人に全員はならないにしても僕はそんな大人になってしまう気がする。どうせ人は自分の知らないうちに、そして意識的に人を傷つけ、傷つけられる生き物で、傷つけられたから相手を傷つけていいと思いつ込んでいるからひどい大人もそうじゃない大人もそうは変わらない。結局は。僕もきっとそんな大人になる。彼だけがそんな大人にならない。そう信じていた彼はいない。彼は本当にそんな大人にはならなかったけど、そうじゃない大人にもなれなかった。

君は何を思って死んでいったの？それだけを考えていたかった。僕の世界には彼の影だけがしがみついていた。

彼のお葬式には何やら少し時間が経ってから行われたので、僕も出席することになった。お通夜の後に火葬が行われたらしく、通常葬儀の後に火葬になると思っていたから不思議で、調べてみると骨葬と呼ばれる形式であれば通夜の後に火葬という手順になるらしい。僕は同級生や彼の両親、親族の涙に包まれたお葬式で彼の顔を久々に見た。一枚の写真。彼の笑顔の写真だった。学校での写真らしくておそらく横には僕がいた写真。彼は長袖長ズボンだった。そういえば彼は基本的にそんな服装をしていた気がする。その写真を見ながらみんなが涙を流す。彼の命としての価値の高さを証明するその光景を見るべき彼はもうこの世にはいないし、魂は写真一枚には宿らないし、彼の意思はそこには、ない。

彼は死ぬとき何を思ったのだろう。意思も魂もそこにはないのに僕はなんでここにいるんだろう。

お葬式が終わり、彼の両親から挨拶された。僕は喋ることができないので、返事を

することができなかつたけど、ぺこりと丁重に頭を下げた。

構わず彼の母親は一言言い放った。

『最後に会えたのが君で良かった。ありがとう。』

違う。こいつの言葉には悪意が滲み出ている。

『猫を助けようとしてあんな不幸に会うなんて※※※※※は優しすぎたのね』

違う違う違う。否定してやる。こいつは何を言っているんだ。喋ろうとしたけどしばらく喋っていなかったのだから声帯が壊れてしまったのだろうか。声が出ない。

『悲しいけど私達の誇りだった。』

嘘つけどうでもいいと思ってたくせに。また声を出そうとして気づいた。

【僕にはそれを言う資格が無い】

それからのことを僕はよく覚えていない。ただ、目を背けていた事実が僕の心を黒く染めていった。声帯は切り取られてしまった。

そうだった。彼が猫を助けるために道路に飛び出したなんてことは嘘だ。僕が、僕自身が言ったんだ。駆け寄ってきた知らないお兄さんに言ったんだ。

『僕の友達が、道路に入っていった猫を助けようとして車に、、、』

僕は嘘をついた。僕は確かにその現場をこの目で見ていたのだから。嘘に決まっている。

【だって彼は自ら車の行き交う国道に飛び出してトラックに撥ねられたのだから】猫なんていなかったんだ。僕の勝手な想像だ。そんなもの元からいない。知っていたのに。僕はその事実が認められなかった。死ぬ時まで彼は美しく、僕の唯一無知のヒーローで、完璧であって欲しかった。彼が自殺だなんて認められなかった。誰が僕を責めることができるだろう？実際僕のおかげで彼が不名誉を被ることもなく、同級生の涙に包まれたお葬式になり、みんなが彼を褒め称えた。僕は何も悪く無い。そう思うことで僕自身を守った。僕は間違っていたかもしれないけど正しかった。そのはずなのに。

そうして僕はついに彼を見つけた。

黒い影みたいなのが蹲っているのを見て、ああ彼がいるな。そう確信した。その影は黒い涙をボロボロと流していた。いや、違う。これは僕が知ってる彼じゃない。そう思った瞬間黒い影は涙を止めて、こう言った。『君のせいで俺は死ねなかった。君が俺を半殺しにしたんだ。みんなを不幸にしてやりたかったのに。お前の勝手な思い込みのせいで!絶対に許さない。お前なんか信じなければ良かった。』お前なんか信じなければ良かった。そう言い残して彼は消えた。一生会うことは無い。彼に『これから』は無いし、僕にも『これから』はない。

僕は彼のことを少したりとも分かっていなかった。彼も僕のことを少したりとも分かっていなかった。人が誰かと分かり合える時なんて一生無い。僕は彼を抱いた偏見とレッテルのせいでしっかり介錯することができなかった。僕は、最低だ。今になってやっと分かった。それでももう手遅れだったんだ。遅すぎた。

,,,彼が死にたいと思った理由を僕は知っていた。それでも僕は嘘をついた。もう取り返しはつかない。マンションの屋上に立つ。怖さはなかった。自分の愚かさに気づいてからの方が怖かった。この気持ちを抱えて生きていくことは僕にはできない。柵を越えて、柵に腰掛けて音楽を一曲聞いた。『暗い日曜日』最も人を殺したという狂気の曲。今の僕には全然怖くなんてなかった。そうして僕は体を重力に任せて楽になった。僕は死に至る病でとっくの昔に手遅れだった。最後に聞いた音はトマトを潰した音に似ていた。

あとがき

僕の小説は会話の無い小説として書かせていただきました。お互いの意思疎通という部分が欠如しているものは会話では無いと僕は捉えているので、僕なりの会話の無い小説です。さて、この小説のテーマである憧れの押し付けをしてしまうことが僕にはよくあります。こいつはこういう人間だからと勝手に決めつけ、その抱いた幻想と実際の行動が合わなければこいつらしくないとか思ってしまって、勝手に怒ってそれを正してやろうと思うことがあります。『お前らしくないよ』なんて。当然人は色々な面があります。普段元気な人が酷く落ち込んでしまう時もあります。とても真面目な人が平気で人を騙したり、貶したりする時もあります。そういうことがあるので、僕は人の気持ちは理解できないし、完全に分かり合える日は来ないと思っています。相手の全てを理解できることももちろん無いと思っています。でも、いつか人と分かり合える日が来ると信じて相手のことを少しでも知ろうと相手を想いやれる人間になりたいなと思います。

かなり伏線を文中に張っているのですが、それも含めて楽しんでいただけたらと思います。特に『彼』を死に至らしめた病=原因はなんだったのか。伏線となっているものをいくつか列挙するならば、『長袖』『骨葬』『最後に会えたのが君で良かった』ですかね。

ご精読、ありがとうございました。

